歌集

開かれた門

歌集

開かれた門

合同歌集開かれた門刊行会編

短歌新聞社

合同歌集　開かれた門

昭和53年9月1日発行
昭和54年5月1日再版

著者代表　島田秋夫
東京都東村山市青葉町4-1-10
多磨全生園合同歌集刊行会

発行者　石黒清介

印刷所　白馬印刷

発行所　短歌新聞社
〒166　東京都杉並区高円寺南4-43-9
電話(03)312-9185番
振替東京5-21683番

定価 2000円

序文

この『開かれた門』は、武蔵野短歌会の第三集の合同歌集である。これに先だつ第一集は、昭和二八年三月の『木がくれの実』（岩波書店刊）であり、つづく第二集は、昭和三四年九月の『輪唱』（白玉書房刊）であるからして、ひさしぶりのアンソロジーということになる。すでに第二集が出てから、二〇年近い年月が経過している。

前回の『輪唱』への出詠者が五六名であったのにたいして、この合同歌集の参加者は一〇名である。多磨全生園から社会に復帰された人、その後作歌から遠退いた人、それに病没された人たちも少なくなかった。この二〇年間は、武蔵野短歌会にとって変貌のはげしい、きわめて痛切な時代にほかならなかったのである。作歌を持続し、個人歌集を出すようないくたりかが登場する一方、貴重な仲間を喪っていく歴史でもあった。

この一〇名は、機関誌「多磨」の短歌欄における主要メンバーである。この

ほかにも、活躍している数名をすぐに思い浮かべることができる。それらの人びとの短歌にうち込んできた営為というものは、通常の結社誌のそれと比較することはできない。生が自分にとって何であったかを問う、かぎりない挽歌とのあらがいから、個の存在感を確認しあおうとするものである。

かつての『木がくれの実』から『輪唱』にいたる世界が、一口で言って、生きる苦しみが歌われたのにたいして、この『開かれた門』の世界は、生きるよろこびとその反面の生くる悔しみ、その相剋が中心となっている。それとともにまた、いっそう『木がくれの実』の時代にくらべて、個性化の志向が顕著になり、きびしく個の内面をみつめようとしている。

武蔵野短歌会の作品もまた、今日の歌壇の問題と深くかかわっている。死への畏怖といった一点はかわらないが、施設の改善や差別撤廃といった外的テーマが稀薄となり、もっぱら個の存在感をみつめるという、いわば内的テーマに挑むようになってきている。しかし、十分にそれに対応しうるところまで、表現の技術や方法も向上するとともに、肉体としての日常感覚をふまえている点に、いいしれぬリアリズムの尊厳を見出すことができるのである。不自由な立

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ちふるまいを通して、生きている実感を噛みしめ、生の精髄をつかみ取ろうとしている。おのずから生きるものの苦悶と、かぎりない孤独感が抽出されてきているのである。

今たちし蟬のぬけがらのせくるるわが掌(てのひら)に沁みる日暑し　大津　哲緒

歯を洗ふ窓の西日が頬に沁むいかなる明日も今は撰ばず

爪切りてくろる看護婦の丸き膝弱視の前に近々とあり　久保田明聖

庭のものみな枯れ果てて広々と盲導鈴鳴らし風の過ぎたり

寝転べばあるかなきかの風立ちてしづかに吾の眠りを誘ふ　汲田　冬峰

個室にもやうやく馴れて部屋の中見ゆる思ひの盲ひのわれよ

恃めなく過ぎゆきて又過ぎ来たり春の来向ふ光しづけし　桜戸　丈司

萩の花地に咲き撓みしだりをの長き思ひの君に会ふかも

印緬国境に敵を守りゐし夢さめて夜半の小床に涙してをり　島田　秋夫

傷夷の足の痛み耐へつつ暁(あけ)待ちて雀のこゑは救ひのごとし

故里の真水飲みつつ苦しみのこもれる一人の歩みと思ふ　隅　広

肉親に会へるともなき奥信濃とび交ふ燕の羽音はしたし　瀬戸　愛子

生れ出でしことのあはれを思ひつつ秋に芽生えし朝顔を抜く　橋本　辰夫

四十年帰るなかりしふるさとをテレビが映す盲ひしわれに

はるばると訪ひ来し君の脱ぐ義足酷暑にやくる石の匂ひす　森下　静夫

みづからが点字に成せし経読みて今宵の不安静めむとする

次々に来たりし人ら腰下す海に向ひて固定されし椅子

屋根よりも高く捨蒸気吹き上ぐる不自由者棟に降りつづく雪　山岡　響

ぬかるみを導きくるる足萎えの君が歩みを伝ふ肩の揺れ

心倦むその折々に下りて踏むひとつ木もなき庭の親しく

さまざまな日常をふまえた、生きる悲しみの表現がみられよう。園内の個室が増え、設備も改善され、また自由に旅行ができるようになるなど、人びとの日常は変わりつつあるが、各自の年齢が深まるにつれて、みずからの人生のありかを問う悲しみは、いつそう熾烈なものとなってきている。

この一〇人は、ほとんどのものが眼が悪くなり、七人が盲人である。少し見えるのは島田秋夫・隅　広・森下静夫の三人しかいない。しかし、本集を見て

いただければわかるように、いわゆる盲人短歌のイメージはない。ゆたかな想像力と感性によって、作品の上においては、眼が見える以上に対象が捉えられている。事象の描写を超えて、地道な日常における心的事実がつかまれている。そこに、作者たちの限りない生の悔しみを見ないわけにはいかない。

作品の上において、作者たちの眼が見えている理由の一つは、追懐にたいする深い執着があるばかりではない。作者たちの日常における精神的な連帯が、それを可能にしていると思われる。一人の視たもの、一人の感じ取ったものが、作者一人にとどまらないで、ひろがりをもった共通認識になっているからにちがいない。個性化にたいする志向が顕著になる一方で、たえず喚起しあっている独得の抒情の場が創られてきているのである。

武蔵野短歌会の人びととわたしの交流も、すでに長いものとなっている。はじめての訪問は、『輪唱』出版記念会がおこなわれた昭和三四年一〇月二一日のことであった。先輩の山下陸奥、中野菊夫氏らといっしょに、会員の新作を批評しあったことを記憶している。これに先立って、雑誌「短歌」に連載した「近代短歌史の民衆」（のちに『近代短歌史―無名者の世紀』と改題して単行

本化）で、ハンゼン氏病の作者たちがリアルに生をみつめた作風に着目したことが、その契機となったのかもしれない。わたしの二六歳のときであった。

その直後の昭和三七年から、土屋文明・五味保義といった先輩のあとを受けて、わたしは「多磨」の選者となった。選者のわたしのほうが後輩であり、作歌のうえでは会員のほうが先行していた。おそらく若手層を起用することによって、若やいだムードを招来したかったからにちがいない。そうした役割を自覚して、この十数年間、各個の個性化をひそかに促しつづけてきたつもりである。この『開かれた門』における作風が、作歌による自己救済にとどまらないで、各個の作者にとっての結実の方向を見ることができればさいわいである。

もはや『開かれた門』そのものを継ぐ新人はいない。病気の性質上、それでよいわけであるが、こうした地道なリアリズムの成熟を願わずにはいられない。現代短歌における療養歌の典型として、短歌の本質を問うテーマが少なからず内在している。いまのわたしは、作者たちとともにその成否に賭けている。

篠　弘

序文

合同歌集「開かれた門」が多くの人々の御援助によって出版される事になり、大変有難く存じて居ります。序文を乞われて、ハンセン氏病の社会的背景や医学の変遷等を書けばそれで役目を果せるのだというので、気楽に引受けて仕舞いましたが、その後皆様の歌集の原稿の一部を戴き拝読するにつれ深い感動を覚えると共に、私に序文の中で求められて居るものは、もっと他のところに在るように思われ、歌の批評はその能力を持ち併せていないが、この歌の一つ一つのよって生まれた背景や一人一人の人間形成の成り立ち等の説明を加えてみる方が、読者のために役立つ序文になるであろうと考え、又この歌集を読んだ時に受けた感動が、どうしてもそうす可きだと私に決心させたのです。然し、文章を書いたり、歌を作る事の出来ない私に、それ丈の役を果せる序文が書けるか否か、甚だ不安ではありますがそうさせて戴きます。此の歌集は今まで出版された多くの歌集と大変違ったものを感じさせられます。ハンセン氏病に罹患して療養所へ入所し、何十年もの永い斗病の生活の

間に、この病が必然的にもたらす心の痛みや肉体の大きな深い傷跡は今も昔も変化は無いのですが、此所三十年近い年月の間にハンセン氏病の治療が完成され、この病丈で死に至ることが皆無になり、又治癒して退院も出来るようになった医学の大きな変化がこの病と斗う人々にも、又それを取り囲む社会の人々の中にも重大な深い影響を与えた為であろうかと存じます。そうした変化の中にも発病によって限られた狭い療園の内に長期に亘り閉じこめられ、肉親を失った者達が互に互を看とり合い乍ら苦しい斗病とその生活の中から、肉体的苦痛や、精神的苦悩を乗り越えて、互に励まし合って勝ちとった—それは本人が意識するとしないとにかかわらず—人間的魅力というか人格形成というか、私共に深い感銘を与える何かをお摑みになっていられるその何かがこの歌集の一つ一つの作品の中から湧き出てくるように感じられて来るのでありましょう。そしてその人間性が社会の人々に何かの反応をおこし、昔には無かった社会との連帯の、面も温い何かを含む連帯が生まれ、限られ閉ざされた療園の中で独り生きるのと異ったものが歌の中にも生まれているからでしょうか。然し、病との斗いも、社会に残っている冷い因習との斗いもまだまだ大きな壁になっている事も事実です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

痛み止まぬわが眼覆いてくれながら春を待たむと夫の呟く　　瀬戸　愛子

残る右眼の視力も遂に失せゆく日夫はヨブ記を読みてくれたり　　瀬戸　愛子

救われる望みあやふくなりし目か治療うけつつ視野ざだまらず　　大津　哲緒

失明の憂ひ消えがたき夜半にしてかわく兎眼の痛みに耐ふる　　隅　広

失明に至る苦しい長い過程が、この歌集にも多く詠まれている。昔と違い今発病したとすれば、化学療法の成功で失明しなくて済むと思いますが、化学療法の長期の使用の途中で痛みの激しい炎症性の眼疾患で、失明する事も在ります。何れにしても、らいの眼症状は少しずつ、少しずつ進行して行くので、その失明に至るまでの時間は極めて長期であり、その上眼圧の上昇等による眼の痛みも激しくそれらの苦しみと焦りと失望との斗いは、その結果が失明という一番人間としての最大の障害である丈に、この期間の苦しみは言語に絶するものがあります。医師や看護婦の励ましや慰めの言葉すらも、時には反撥したくなる時もあり、自分の苦しみと共に苦しんでくれる友人や夫のその苦しみや悲しみ丈が唯一つの心の支えとなっているのでしょう。

眼瞼筋麻痺による兎眼のために、角膜が乾燥したり、外傷を受け易く失明に至る

こともあり、毎日の生活の一つ一つの小さな心配りも大変な努力でもあります。

全盲になり果ててより平らなる心となりてひとり茶を汲む　　橋本　辰夫

遂に視力をすっかり失っても、もうそれまでの長い斗いの間に、その苦しみの中から心の平安を見出す方が多いようです。その方の失明した目の周辺にただようおだやかな温い表情は、私共の心を深い感動に追いこみ、この人々と常時接する事の出来る私共職員は幸福だナアと思うのです。

眼が欲しと呟くわれの唇にふれさやかに菊の匂ふ白妙　　橋本　辰夫

曇りなき眼を人のいぶかしみ杖つく吾の視力をば問ふ　　大津　哲緒

視力を失って一応は平穏な心になっても、その心の底にはもう一度視力をと願う人も多く、恵まれた方は手術により開眼の幸を得る人も在ります。

兄が書く文字らしからぬと見て二年白内障の患らひ告げ来　　隅　広

盲ひに馴れゆくまでの混迷期兄は独りし越ゆるとおもふ　　隅　広

自らの失明までの苦しみを思い返し乍ら、肉親の兄の失明への過程を無事に乗り越えて欲しい否乗り越えられる筈だと励ます程に、この方にはもう何か素晴しいものが生まれてゐるのだと思い、今更のように驚きを感じます。

舌読は唾液に濡れて幾度も読まむ聖書の点字消えゆく　　瀬戸　愛子

舌読とは聞き慣れぬ言葉であるが、この病気では手足の運動と知覚の麻痺が必発症状であり、手指は強く屈曲し、その上皮膚の感覚が麻痺しているので指先で点字を解読することが出来ないので、感覚が割り合い良く残った口唇や舌先で点字を読むことになる。口唇も下垂があると、舌丈が唯一の指先の代りになる。舌の先で点字を読むのが舌読である。何回も何回も舌読する。大変な苦労であるが、この陰に点字を奉仕してくれる多くの方々の支えがあってこそ失明の方は点字によって視界を拡げて行くことが出来る。こうした陰の奉仕者の力は見逃すことが出来ないし、お互の心の交りは想像以上に強く且美しいものです。

敷石道埋めたる桜落葉の露広島の朗読奉仕者と踏む　　山岡　響

最近は、テープコーダーの普及が目ざましく点字の一部は之に替りつつある。お互の声の便りも活溌に行われ、社会の方々との声を通しての交流も大変な慰めである。多磨全生園の盲人会は「日本ハンセン氏病テープライブラリー」を開設して、療園のためにテープのサービスを行っている。そしてこれに奉仕して下さる方々は全国各地から応援をして下さり、こうして時には訪問してくれる。声丈の知り合いが、直接お会いして園内を案内する盲人の方々の白杖の音も一層明るさを増しているのである。でもこうしたハ氏病丈のテープライブラリーが必要であるのは、とりもなおさず一般のテープライブラリーがその門を鎖ざしていることにもなるが、一部のライブラリーは積極的にハ氏病への貸出しをして下さる。

ここに詠まれた「敷石道」はこの療園の武蔵野の黒土は霜に弱くぬかるみ、足の悪い病友は難行するので、御影式の石板を一枚一枚を世間の方々の寄贈で買い求め、園内の道に敷きつめたものの名残りの道のことであろう。

療養所ありて救はれし吾と思へ柊垣の中に四十年住む　　森下　静夫

不自由度すすみて寮舎移り住む一つ窪みに落葉よるごと　　大津　哲緒

四十年、否もっと長くここに療養している人も多い、らい菌は化学療法で体内から消滅出来ても、麻痺した手足や失明は元にかえらぬ。

限られたこの土地が唯一の場であり故郷へ帰って行くことも出来ぬ、不自由な方々は、夫々の不自由の度合いによって区分されて住み生活の介助を受ける仕組になっている。昔はやや軽度の不自由な方が重度の不自由な方の看護や介助にあたっていた。今はその軽症の方も重症になり年老いて来たので職員がこれに替わって世話に当る。重度の不自由な方々はそれ丈肉体の苦しみと斗う時間が長く、又深酷であったのでその反面己の人間形成に優れた方々が多く、生活介助する吾々が教えられ学ぶことも多い、不自由棟内のお互の心の支え合う姿や友情は美しく又訪ねてくる友人とも肉親以上の交際で、感銘を受ける。

草深き望郷台にのぼり来て少女の像と夕映えに立つ　　橋本　辰夫

別れの時をおしみて登り給ふ望郷の丘朝の草露　　山岡　響

望郷台、望郷の丘と呼ばれる園内の小山は病友の手で黒土をもり上げて作った丘で、今はつつじ、桜が美しく、その上に子供達が作った石膏の少女の像が立って居る、

今では想像すらも出来ない事であるが七十年前にここにこの療園が出来た時、一部の村民の反対が強く、又その当時の隔離政策によって深い堀がめぐらされ、高い板塀で囲まれて、園内から外を眺める事は不可能であった。この病気は少年期に多く発病するので何十名の少年少女が入院していて、夫々に父母を慕い故郷を夢見て悲しむのを大人達は何とか慰めようとして、この小山を作り望郷の丘と名付けた。夕方になると秩父の連山や富士が夕焼に美しく映え、筑波の峯々も遠望出来、少年少女は何時までもここに立ちつくしていたと云う、今日では日本の本土から少年少女の発病は零になり、もうこの丘に立ち故郷をなつかしむ少年は居ない。この歌集の同人の中には、かつて少年として又少年達の教師や「お父さん」「お母さん」という少年少女の寮父母として、少年達とこの丘に立ちつくした人々が居る。もう高い板塀堀ももなく、低い柊の生垣が美しく療園と境して、昔門番の居た門も開かれたままであり、町のバスも門内に入って停まる。

かなしみて散りしく花をみたりしや癒えざりし遠き世の癩者達　　橋本　辰夫

世は移り変り、らいも治癒する病となった。発病する人も日本本土では十名程の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.